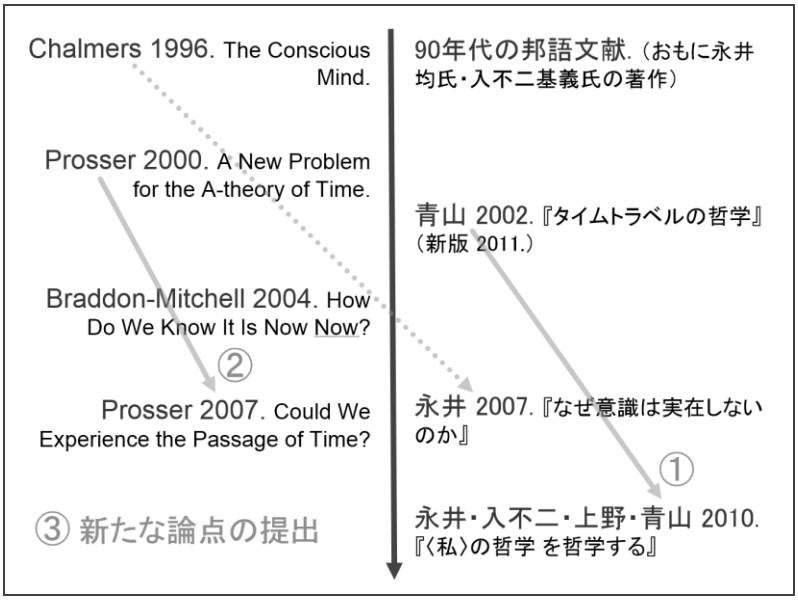
2015 年度 日本科学哲学会ワークショップ資料

随伴現象と随伴現在　――今が今だとなぜ分かるのか

青山拓央（山口大学）



たとえ時間のＡ理論（McTaggart）が正しく、特別な時点としての「今」が存在するとしても、それに対応する事実――今が現実に今であること――をわれわれは認識できないのではないか？　なぜなら、その事実は因果的に（あるいは自然科学的に）無効力であり、認識の内容と無関係であるから。この問題は、発表者の知る限り、英語圏と邦語圏のそれぞれでほぼ独立に検討されてきた。その結果、英語圏と邦語圏のいずれでも、他方の亜流に陥らない深化が生じたが、双方の良い点を選りすぐった包括的議論はまだ存在しない。本発表ではその端緒を開くため、上図に示した文献地図のうち、Prosser (2000; 2007) および青山 (2002; 2010) にとくに注目し、そこから同型の議論を取り出すとともに、その差異についても解説したい（図中の②と①に対応）。その後、時間の許す限りで、上記検討から引き出される新たな論点の一つを紹介する（図中の③に対応）。

「今が今だとなぜ分かるのか」という問いはもちろん、指標詞的な「今」――その語の使用と同時である時点――に対して発せられたものではなく、Ａ理論的な「今」、いわば現実の「今」に対して発せられたものである（前者について「今が今である」ことはトートロジカルに真であるから）。この問いをめぐる Prosser／青山 の議論の特徴は、Ａ理論の正否に対して中立性を維持できる点にあり、さらにその議論は――Braddon-Mitchell が牽引した *Analysis* 誌上での「現在 - 論争」と異なり――現在主義（presentism）の採用によっても回避しえないものである。